# 植物物語

宮下太郎

宮下　太郎〈みやしたたろう〉

昭和十四年奈良県生まれ。三十六年東北大学農学部卒。東京大学農学部研究生をへて彫刻家、朝倉文夫の内弟子となる。四十年頃より環境調査や計画の仕事に関わるようになり、四十四年多摩美術大学講師、現在教授。美大生に自然や環境について教える一方で、多摩ニュータウンの自然計画等、多くの環境プランニングに関わってきた。趣味は連句・散歩・焚火・猫の飼育等。現在多摩市桜ヶ丘在住。

植　物　物　語

1997年3月20日初版
著　　者　宮下太郎
発 行 者　タウン出版
印刷製本　東京都多摩市永山1-4 グリナード永山1F
有限会社　プリント永山内
ＴＥＬ　0423－71－4655
ＦＡＸ　0423－71－4910

検印廃止、落丁、乱丁本は、お取替えいたします。

定価　2,000 円
送料　　300 円

# 植物物語・目次


ウツギ・ウノハナ……1
白い花の咲く頃……2
榎伐られて……4
月下美人を食う話……6
芭蕉と蕪村（或る風景論）……8
カゼクサとチカラシバ……10
コウヤボウキの話……12
春の七草（ナズナ粥）……13
野遊び……16
梅ヶ香……17
鴫立庵の大欅……19
私の自然教育……21
朝倉先生……23
マタタビの花の咲く頃……25
幹の色合い……27
根元の話……29
三河の赤米……31
草木染の話……32
イモの季節〈芋・薯・藷〉……34
葉っぱの話……36
ヨモギの五徳……38
緑の日……40
野草とり（その一）……42
野草とり（つづき）……44
タンポポあれこれ……46
法隆寺と四天王寺……47
アマチャヅルの話……49
象潟の合歓……51
キノコにあたった話……53
焚火の小春……55
山の辺の道……57
こんにゃく物語……59
雑木のうつわ……61
かたくりの話……62
竹の秋・麦の秋……64

花博・嵯峨野・曽爾……66
T先生の自然的生活……68
自然の見立て……70
松のことは松に習え……72
彼岸花の風景……74
黄金色の秋……77
黄金茸の話……79
くぬぎ林の文化論……81
くすのきの話……83
梅・あたみざくらなど……85
グリーンライブセンター……87
月と花・蝶のことなど……89
ドクダミの花咲く頃……91
葉っぱの話……94
カラマツマイタケの話……96
トリカブトの話……98
馬ブドウ……100
どんぐり異変……102
桃栗三年柿八年……104
猿の名の付いた植物……106
毛糸の話……108
真鶴岬の原生林……111
しだれ柳の芽出し……113
芹採り、桐、藤のことなど……115
卯の花垣……117
相模原の大欅……119
夏の旅……121
苦瓜のことなど……123
物草太郎……126
お爺さんの柴刈り……128
赤松林の話……130
春日野の初詣……132
猫談義……135
梅ヶ香……137
カタクリの話……139
みどりを育てる……141
卯の花……144
樹木あれこれ……147

草木のちから……149
今年の夏……151
毛の話……153
お山のセイタカアワダチソウ……156
根元の話など……158
緑の装い……160
Sさんのこと……162
梅一枝……165
春の八曜……167
野遊び……169
原点思考……171
木が太る話……174
百日紅並木……176
散り蓮華……178
大雑草……180
椎の実……183
おにふすべ……185
木を植える・育てる……187
龍の玉……189
長谷のヤマアイ……192
お菊虫……194
お菊虫その後……196
ウノハナほか……198
いろは坂……201
「今年の夏」……203
エコロジー時代……205
藪の美学……207
河原の情景……210
椎の実……212
焚火の授業……214
万年青の話……216
葉蘭の根元など……219
ミズキの話……221
野草料理の話……223
卯の花……225
あとがき……229

装画・カット　五十嵐　大介

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# ウツギ・ウノハナ

ウツギの花の咲く時期は丁度梅雨の前頃で、[illegible]山の装いも緑から何となく青っぽく移り変わる[illegible]ウツギの親類にはヒメウツギ、マルバウツギなどがあるが、中でもウツギはどうした訳か人間生活に近いところに目立って存在しているようだ。茎が中空だから空木という方が、のだが、花が咲いている頃にはウノハナという方がぴったりくる。卯の花、即ち兎の花ということが、今年はウサギ年でもあり私は年男、どうも最近ウサギについて心にひっかかるものがある。

というのは一つはウツギの茎（幹或は枝といってもよいが）は古代の火おこしの火きり杵としてもっぱら用いられていたのではないかということ、もう一つはウノハナは文字通り兎の花ではないかという疑問からである。さらにいえば、人里近くの畑の境界や垣根に何故ウツギが多いのかといったことなど。

二年程前に和光大の関根君が学校を訪ねてくれて私がゼミの教室がわりとして使っている合掌造りの炉端に於て「火おこし」の実演を学生達に見せてくれたことがあった。その時の火きり杵の材料がウツギであり、これが最適であるということを彼から聞いた。火きり杵はウツギの他にもアジサイやネザサのような茎が中空のものなら結構使えるらしいがウツギは材質チ密、昔から木釘にも用いられた程固いからぴったりだという。火きり臼の方は杉がいいらしく、実際に私もやってみたがきりもみで三、四分程頑張って火種が出来たものである。慣れれば十秒くらいで火種が出来るらしい。

火は人間にとって貴重なものだが、今は火の根元的意味など誰も考えてみようとしない。スイッチでポッ、蛇口でジャッという世界での思考は昔とはもうよほど違ったものになっている筈である。

当然火打石以前の木と木をこすりあわせて火を造った時代の人々の心など考えられないであろう。しかし炉端での現実のきりもみによる火おこしの過程で少くとも私は何か不思議な感動とともに、古代の人の心の端っこあたりに触れたような気がしたのである。

茨城工業学園図書館
蔵書

京都の上賀茂神社（別雷神）は古い社でそこの新年の縁起物として「卯杖」なるものがあると何かで読んで覚えていた。それで今年京都在住の友人に依頼して卯杖を送っていただいたのだが、卯杖というからには杖にする長いものと想像していたらさにあらず、十五センチばかりのウツギの茎を二本組みにし緑色のもしゃもしゃしたヒカゲノカズラを巻きつけ、先端に実をつけたヤブコウジがちらちらとしている。一目見て「卯杖」が火を表現していることがわかったがヒカゲノカズラは炎、ヤブコウジは火の色を現わしているのであろう。もちろんウツギは火をきりだす本体に違いない。とすれば何故上賀茂神社に卯杖が、という点はおくとしてウツギが人間生活に近しいところに目立つということの謎は解けてきそうである。畑の境、田と溝のはざま、そして垣根と人くさいところにウツギが多く見られ、初夏に真白なウノハナを咲かせる。火打石以前、ウツギを火きり杵として用いた名残と見るのは或は早計かも知れないが、そう解釈しなければ見えてこないところがある。

そしてまた、万葉以来ウノハナに来て鳴くホトトギスも、これを単に季節的同時性のとりあわせとしてでなく、女性への男性のラブコールと考えれば必然的にウノハナ、卯の花、兎の花の謎もほぐれてきそうではないか。卯の花垣には女性のイメージがつきまとい白兎と通うところもある。兎は古くは菟とも書き、古い地名として菟多、菟野、菟足、菟道などいろいろ残っているが、これを天孫系の人々が在来人の、特に女性を兎と見た名残と見てもよいのではないか。

# 白い花の咲く頃

初夏から梅雨にかけて野山にも街中にも白っぽい花が目につく。青葉の中で白い色はよけいに目立つのだが一寸列挙してみれば、野山ではミズキ、エゴ、ホウ、ヤマボウシ、里あたりではノイバラ、ウノハナ、スイカズラ、クリ。街中ではタイサンボク、ネズミモチ、クチナシ。地面にはドクダミの白十字。

野山、里、街という区分も今ではぼやけたイメージになってしまったが、衣更、そして田植の始まる何となく

水っぽい季節になると「白い花の咲く頃」の歌を想い出す。この淡い恋歌の白い花には何が一番合うことだろう。〈くちなしの花〉や〈からたちの花〉といえばはっきりしているが、かえってぼやっとしているせいで初夏のやるせない気分が出ているようでもある。しかし初夏はどちらかといえば〈出合い〉の季節で〈さよなら〉にはそぐわない感じだ。

今年の初夏は雨が不足して水っぽさが足らないが、六月はじめ我家の庭にはドクダミの花がまっ盛りである。一週間ほど前白金の画家Aさんから珍しい八重ドクダミをいただいた。昨年それまでたゞのドクダミの中に突然八重咲きのものが現われたということでまさに奇瑞というべきだが、一年たってその一株が我家に到来したわけで、どうやら突然変異らしい。白十字の花弁（実は苞）が花軸の上方まで咲きのぼり見映えがする。いずれ庭に下ろして増やしていくつもりだがいかんせん仮の宿の、私としては、蕪村の

「愁ひつゝ丘にのぼれば花茨」の句のような、ノイバラの花咲く丘や水辺が近くにあるところに住みたい思いがあるのだけれど、何せこう地価が上るとどうしようもない。八重ドクダミでも増やし咲かせてなりゆきにまかせる他はない。

ノイバラは何か淋しげな感じだが、これも環境のせいでそう見えるのであろう。人工の紅バラ、白バラ達は殆どが人家の庭や公園にあるから華やかにも見えるがその本家ともいうべき野生のノイバラはというと、それこそ草ぼうぼうたる丘の中腹とか荒れた川辺の土手とかにほつほつと咲いている。大体人手によって刈られていないようなところは、そこが身近であればあるほど淋しい感じがする。私は何も淋しいところへ住みたいとは思わないが、それはともかくノイバラは遠目にはウノハナかと見えることがあり、先日も道志街道あたりで間違えてしまった。高いところに咲いていたのがウノハナ。ノイバラは低い水辺添いが多かったが、互に寄り添って咲きあっているところもあった。まわりにはマタタビの葉が白く変りつつあり、ヤマボウシの白い帽子花が光り、エゴの白い花がうつむいて咲き残っていた。

多摩あたりではぼつぼつ栗の花が咲き始め、緑一色に見えていた山林の一部がにわかに黄色っぽくなったかと思うと次第に白味を帯びてくる。平地の田や畑も最近は

栗畑にするところが多く、これは手間もさほどかゝらず成長も早いからあれあれと思う間もなく栗畑から栗林に変貌するのだが、夜目にも白く盛りあがり咲くクリの花の集合とその匂いは今日の土地問題、環境問題とも深く関わる滑稽な現実と云っていい。

「白い花の咲く頃」は初夏である。折しも東京上空にはケサラン・パサランが飛び交い話題となるが、これの正体はといえば、チガヤ（ツバナ）の穂わたである。数年前の少女マンガ紙に〈おしろいを食べる化物〉とかいう記事かマンガがのったらしく、そう思っている若い女性が沢山いる。東京湾の埋立地に拡がったチガヤの群生からふわふわと風に乗って飛んでくるわけだが、この若い穂を抜いて食べた想い出がよみがえってきた。

# 榎伐られて

エノキという木を知っている人は少ないようだ。ケヤキと一寸似た感じもするエノキは、榎・榎本、榎堀などと名字にも結構あるがケヤキほどには知られていないのはどうしたことだろう。

我国の名字に使われるのは植物のなかでは松・竹・杉・栗・藤などが多く、草類は少ない。調べたわけではないが、人間生活と密接な関りのあるもの、それも場所（環境）を表わしているような種が多く、先にあげた五種などは例えば、松山、松田、松林、松村、松原のように、山、田、林、村、原がみなちゃんと付いてそれぞれの場の特徴を表わしているといってよい。私はこれを「名字生態学」などと云っているが、欅が出てこないのは不思議である。もっとも欅の古名は槻（ツキ）というから大槻などの名もあるが、利用度に於てケヤキに劣るともいえるエノキが、昔はもっと身近な存在として受けとめられていたと思いたい。

樹木は或程度大きくなればそれなりの存在感が現われてくるものだが、エノキの場合はケヤキみたいに端正でなく、どちらかというとアンバランスな樹形であるところに一種の「味」があるように思う。全体のムードというものは樹幹や枝や葉によってかもしだされるが、部分である葉っぱがこれまた味がある。ケヤキの葉はその樹

形にも似てまとまった形だが、エノキは少しいびつであり、ダークグリーンの色調である。樹皮の色合もがさがさとして白っぽくケヤキのようにつるりとはせず、したがって見映えもしない。〈植物はその環境と共に見るべし〉との見方によれば、エノキは割合に人間臭い環境、生活の歴史の古いところ、特に水辺、山と里とのはざまなどに多く見られ、よく見れば、数多い鳥や昆虫にかなり好まれている樹木なのである。鳥はヒヨドリ、ムクドリ、特に椋鳥は芭蕉の句にもあるが実にエノキとよく似合う。蝶にいたってはオオムラサキ、ゴマダラチョウ、ヒオドシチョウ、テングチョウなどのそうそうたる連中がエノキに頼っているのである。そうした鳥や蝶の寄りくる身近なエノキの独特の味を昔の人はちゃんと見ていたのであろう。今に残るエノキの一里塚は一体誰が「一里塚には榎を」と進言したのであろうか。

七月初旬に三河の西尾・吉良地方を訪ねた時、崖地や起伏や台地の端っこあたりにエノキが随分沢山あった。時には巨木もあって黒々とした樹冠から遠目にもわかり近寄って見ることもあった。それだけ古い場所柄というか、人間と自然とのいわばはざまの樹木ともいうべきエノキの多さに驚かされた。勿論、シイノキやクスノキ、イスノキなども多かったが何せ私はエノキ党なのである。常緑よりも落葉の方が肌に合う。同行の画人斉藤吾朗君はモナリザ模写で名高い人だが、彼の案内で西尾の常福寺、仮宿の大仏というのを見に行った時、かってのうっそうたる林が妙にスカスカしているということで、そのせいかコンクリートの大仏様はよく見えたのだけれども、近くに大きな切株が二つあった。根際の様子や近くの植生からも大エノキの切株にまちがいなく割合最近に伐られたものらしい。傍らには鯖大師というこの地方独特の魚を下げた石の地蔵様が立っていて本物の編笠をかぶっていらっしゃる。梅雨明け近くの少し濡れたその笠のふちによく見れば蟬の脱けがらが二つついている。エノキをよりどころとして土中に数年いたものの、土をぬけてエノキの根方にとりついたところが上には何もない。やむなくドチは（三河では蟬の幼虫をドチ、ドンゴなどと呼ぶ）そばの鯖地蔵様へ這いのぼっていき、たどりついた笠の端っこで油蟬になったのである。

二人は何故か感動してしまいしばらくその場を動けなかったが、まだまだこれから次々とドチ達は鯖地蔵の笠

へと上っていく筈である。画人はそれを是非見届けましょうと云ってくれたが、二本の大エノキは一体どんな理由で伐られてしまったのであろうか。

# 月下美人を食う話

七月初旬、月下美人の鉢をいただいた。蕾が八つもぶらさがっている大きな株で、まもなく咲きそうだという。蕾といっても葉っぱのふちからロクロ首のような花茎がぶらさがり、その先端に八センチくらいのピンクがかった白い蕾を横向きにつけている。一鉢に八つもつくというのは珍しいらしく、蕾が小さいうちに大半がぽとぽと落ちてしまうこともあるのだそうだ。

七月十二日の昼頃から八つのうち三つが眼に見えて大きくなり今宵の開花を予想させたから近所の知人を招待することにした。八時半頃に開花が始まり蕾の先端が開き始めたが、気になって外に出て見るとどうやら十六夜あたりらしい。我々はビールを飲みながらの鑑賞となったが何やらいい匂いが漂い始める。花弁の奥の方には先端がいくつかに割れためしべと約二〇〇本ほどの絹糸のようなおしべが見える。じっと見ていると花弁が口を開く調子で少し揺れているようでもある。ペルシャ猫のキューちゃんを脇へ座らせたら神妙にしてくれてこれはバタ臭いけれども絵になる光景だった。十一時過ぎ頃にピーク、もはやビールはきれていて酒にきりかえながら堪能したが、

〈ビール飲み酒飲み月下美人かな〉と迷句が出た。

翌晩はまた三つ、今度は十時頃に開花が始まったが昨晩ほどの力がない。この日も近所の知人夫妻を招待、月下美人の香りの中でくさやでいっぱいとはちと無粋だったか。

三日目は最後の二つが十一時頃になってようやく開花の気配。しかし完全に開くかどうかもおぼつかぬ有様で力なく垂れている。こちらも感激が薄れてきて早々に寝てしまったが、月下美人も随分疲れたことだろう。ともかく花を咲かせるということは植物にとって大変なエネルギーである。実をならせるのはなおさらだろうが恐らく実をつけることはあるまい。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

さて月下美人を食ってみようと思いたったのは初の開花の翌朝のことで、だらりと垂れきった終りの花を見てからである。何となくこのままにしておいたり、また切りとって捨てるにしのびない。たしかどこかで食えるというような話を聞いたことがあって、それで冷蔵庫へとっておいた。

私は案外にゲテモノ好きで山野草キノコの類は割にいろいろ食している方である。キノコの場合はしかるべく相談にのってくれる相手がいるのだが、実際に食べる段になると一応電話ででも確めないと家内が承知しない。珍しいところではタマゴタケ、ササクレヒトヨタケ、カラカサタケ、ヤマドリタケなど一寸見た眼にはとうてい食えそうにない代物もちゃんと試食済みである。ところが月下美人は初めてでまずは天麩羅に挑戦。それから味噌汁、おひたし、漬物と全部で八つある終り花を三四日かけて食べてしまった。好みでいえばおひたしが一番だった。ゆで汁は真黄色で気持悪いほどだが、だしにひたしてかつおぶしをかけて食うとヌルヌルとしながらも何とも独特の味わいがある。ロクロ首の花茎はぬか味噌漬けとしたがこれはまあまあで、天麩羅、味噌汁はやや食べにくい。やはり多少ともアクがあり、ゆでておひたしというのが正当のようだが、正直いってそれほど旨いものではない。子供達は「絶対に食わねえ」と横眼で見るのみ、家内はおひたしはまんざらでもない風であった。

後日知人に聞けば、開花前に切りとって瓶に挿しておくと水がピンク色に染まるという。まさに月下美人の名にそぐわぬ真夏の夜の夢のような話だが、咲き終った花を煮れば真黄色な色が出るというのも妖しい話ではないか。

じつは月下美人を食って以来、気のせいかはた連日の猛暑のせいか、顔の皮膚がつるつるしてきた感じがしている。それでさる現実の美女とさきほど紹介した拙句を発句として文音連句を巻き始めたのだが、

ビール飲み酒飲み月下美人かな　太郎
走りて涼し薄き雲々　葉子

第三は

容顔はつるりと八十翁にて　太郎　と続く。

即ち歌仙〈月下美人の巻〉の始まりである。

# 芭蕉と蕪村（或る風景論）

東京附近では庭に芭蕉が植えてあるのをあまり見かけない。寒さに弱いせいもあろうが、これが庭にあると夏の頃は大変目立つし、また独特の涼味がある。奈良の父の家には昔見事なのが植えてあったそうだが、私が三つくらいの時に「芭蕉の葉っぱに蛙が一匹」とか云ったらしく、たまたま来ていた近所の俳人が大変ほめたということだ。詩人の素質があるといって父もその時は喜んだらしいが私はまったく記憶がない。だが恐らく実際に芭蕉の葉に雨蛙が止っているのを見た実感がふっと口に出たものであろう、俳諧は三尺の童児にさせよという言葉を想うのみである。

ところで松尾芭蕉は知っていても、植物の芭蕉を知らない若い人が多い。俳聖芭蕉の理解にもこれでは一寸まずいと思うのだがどうだろう。俳人の多くは俳号を持ちその重みというか軽みというか、本人であって本人でないともいえる感覚は独特のものらしい。そして他者もまた作品を俳号の人の作品として鑑賞、理解するのである。こうしたことは俳句のみならず、諸芸全般にもいえることだろうが、当人が自らの雅号をどのようにしてつけるのかということも仲々興味深い。また雅号を幾度か変えたりするというのもその背景の理由なりを考えてみればこれもまた面白い。偶然というべきか必然というべきか、桃青から芭蕉へと名を変えることになるのは、深川の杉風下屋敷の庭へ門人が芭蕉を贈ったことによるという。桃から芭蕉へとはこれは一大飛躍であるが、植物感覚でいえば、青い桃などというのは一向に目立たぬ代物で、ましてや江戸初期の桃はまだまだ貧弱なものであった筈だ。

バショウはというとこれは独特の風情がありかつまた一種の滑稽感が漂う。あの大きな葉っぱはどこか頼りなげでそれを支える幹らしいものがない。草のようでもありまた木のようでもあり、全体として意外性というか異質感というべきムードがある。中国の明から清へ至る頃の風俗画には随分バショウが描かれていることが多く中国南部の庭園にはその頃太湖石とともにバショウが植え

られることが流行ったらしい。我国への渡来も恐くは江戸初期あたりだろうか、深川への到来もしたがって当時としては珍らしいものであったろう。あれが庭にあると、といってもあまり大きな庭では目立たないし、バショウの存在が目立つ程度の規模、まあ前栽ともいうほどの比較的小庭にあってこそその存在感は際立つし滑稽感も強まると思う。当時の庶民の庭は、単に前方との目隠し程度の垣根を設けた露地風の小スペースであったと考えてよく、芭蕉庵の居所からもバショウの存在はかなり目立ったものであったろう。「芭蕉野分して盥に雨を聞く夜かな」の句にその実感がこもっている。

滑稽感覚というのはその物自体がそうだというよりもまわりの世界とあいまって見えてくるものだと思うが、芭蕉のバショウ感覚ともいうべき点について焦点をあてた考え方もあってよさそうである。

次は蕪村だがこれはカブの村である。これまた滑稽感覚とともに一種のペーソスの漂う風景と云っていいだろう。蕪村の前は宰鳥とか宰町という一寸わかりにくい号だったようだが、カブの村になってから自づと蕪村らしくなったのかも知れない。どうも宇都宮近辺を流浪中に採用したらしいのだが、カブの畑の風景というのは、荒蕪地という言葉もあるくらいに大体が少し淋しい。大根畑の方がまだカラリとして明るさがあるように思うがどうだろう。ともかく芭蕉と蕪村をバショウとカブの村と見れば、その言葉感覚の違い、或いは風景としての違いは歴然たるものがある。特に風景としての見立てでいうならば、一方は狭く、一方はまあ広い。画家の視点でいうならば風景としてのテーマ性、つまり画のタイトルとしては〈バショウのある風景〉及び〈カブの村〉ということになる。この違いに注目してほしい、とは私が画学生に云うところの文句なのだけれども正直いって一寸説明しにくい秘密の面でもある。どちらにしても単なるテーマ、構図上の問題にプラスして明暗、風雨、人事等々が重なりあって画の表現及び表情が決ってくるのである。芭蕉と蕪村の風景論は両者の句の世界を離れては意味がないかも知れないがこんな視点での見方も面白いと思うのである。

# カゼクサとチカラシバ

今年の夏から秋へかけての天候不順は異常だった。暑かったり寒かったりその違いが甚しかった。おかげで私の体調も不順、運動不足解消の為にもこのところ出来るだけ散歩をする。散歩するにしても身体の調子のあまりよくない時は道端の植物達へのあいさつのボルテージも低くなる。したがって発見も少ないし驚きもない。発見、驚きを精神の活性剤としてそれが身体機能をも高めてくれれば理想的なのだが仲々そううまくはいかない。とはいっても天候不順によって植物達がびっくりしているさまはいくつかわかるもので、九月末だというのにもう茶の花が咲き山茶花が咲いているのを見た。とにかく彼岸過ぎの一週間が一寸寒すぎた。

私の散歩コースの一つに多摩川の土手がある。土手といっても平らな表面は舗装されているのだが、支流の浅川あたりの土手になると昔なつかしい土の道が続く。なぜ昔なつかしいかというと、幅二米くらいの土手の上の道のまん中にカゼクサがびっしりと生え、両側のふちにはチカラシバがびっしり生えているからだ。昔の土の道、それも一寸盛りあがったような道にはしばしばこんな状景が続いていたから、植物の名前を知らない人でも年配の方ならきっと想い出すに違いない。カゼクサもチカラシバもイネ科の多年草でかなり大きな株になる。土の道のまん中にはカゼクサとオオバコがずっとベルト状に続くのが普通だが、そこは丁度車のわだちのすきまに当る。道ばかりでなく、町なかの原っぱなどにも昔はカゼクサはずいぶんはびこっていたもので、これらを結び合わせて人をひっかけ倒して遊んだものだ。つまりは常時適度に踏みつけられるようなところにカゼクサが生えてくるわけで、一寸湿ってくるとオオバコが混る。オオバコの古名は車前と書く。まさに牛車などが通る土の道の「車の前」の草の状景を活写した言葉ではないか。生態学的には踏跡植生、すなわち〈カゼクサ・オオバコ群集〉というが、要するに植物的世界の姿がそこの環境の質を表現しているわけだ。「植物は環境の衣装です」とはいつも学生に云う言葉である。

土の道の両側のふちの方に生えるチカラシバは丁度煙突掃除のブラシのような黒褐色の堂々たる穂をつける。カゼクサの女性的姿に対し男性的な姿といってもよいが、これを抜こうとしても仲々抜けるものでないからチカラシバと名がついたらしい。我家では十数年前に飼っていた愛すべき牡猫ギーの尻尾そっくりというわけで今だにこの草の呼び名は〈ギーの尻尾〉である。チカラシバの力強い穂が都会周辺では段々少なくなってきたのは淋しいかぎりだが、何よりも道の空間が植物的世界の入りこむ余地がないほど舗装され、道のまん中やら道の辺などという微妙な感覚の背景が理解されなくなるのはもっと淋しい。これを単に散歩者の慨嘆ととられても困るが、感性には敏感であったとしても反応すべき対象がなければどうしようもないのである。辺という言葉は野辺、山辺、岸辺、道の辺などいろいろあるが、つまりは空間と空間とのはざまを示す言葉であろう。ここからここまでが道路幅員というような舗装空間よりも、適度に草が住みわけ、土手なり溝があったりする土の道にこそ〈道の辺〉の状景があり、かつそこには植物的世界の住みわけによる微妙な連続空間の姿があった。川辺、川岸の風景にしても同じことで、現在のメリハリのみ際だつ無機的水路（川とはもういえないような）無機的道路からはもはや語りかけてくるものはない。無機的空間の方が管理しやすいから都合がいいのだけれども、人の心の情緒性はますます希薄なものとなってくる。たまに〈緑〉があっても富栄養状態の環境ではオオブタクサなどの帰化植物群の巣窟になったりして刈られもしないから人も見ようとしない。

浅川の土手の、昔なつかしいカゼクサとチカラシバの土の道は、だから貴重なのである。しかしこの道が近くの人達によって絶えず歩かれ、使われ、かつ適度の草刈りが定期的になされているが故に今の状景が維持出来ていることを誰が知っているだろう。人とのかかわりがそこに存在する限りは道自体の状景は変らないまゝに持続してゆくのである。

こんなことを思いつつ散歩しているのだが、いずれは土手の上の土の道もアスファルトで舗装されていくのであろう。踏みしめる足元に植物的世界が無くなると散歩の楽しみも半減するというものである。

# コウヤボウキの話

十一月初旬所用で千里ニュータウンや万国博記念公園を見学に行った。昭和四十五年のあの熱気にあふれた状景は夢か幻か、今はその後に植えられた百万本とかの樹木が生い繁る見事な森林公園となっている。万博団地として取得された当時は竹藪を主とする雑木の丘陵地であったが、もし変化なくそのままの遷移を続けていたとしてもさほど変りばえのしない風景のままであろう。自然の改変、或は破壊の上に成立した新たなる環境も、特に万博跡地公園の場合は〈緑の復元〉に関しては立派にその成果を現わし始めているといってよい。"自然のままがよい"というのは一般的な考え方ではあるが、今日の環境に於ける〈自然の回復〉〈緑の復元〉ということにもまた暖い眼を向けてもらいたいのである。

さて大阪の帰りに奈良の正倉院展を見に行った。大変な人出の中で私の眼をひいたのは「子日目利箒」〈ねのひのめどきのほうき—儀式用の玉かざり箒〉であった。これはその昔、持統女帝が卓上のほこり掃いに用いられたものと聞いてはいたが、正倉院展の解説文によれば、子の日の儀式は、年の初めに天子が鋤を用いて田を耕し、皇妃が箒を用いて蚕の部屋を掃うという中国の故式にならい、わが国では孝謙天皇の時に始修されたとある。そして天平宝宇二年正月三日初子の日に内裏での儀式に用いられたものが宝庫に伝わっていたということである。目利箒の名はその材と目された蓍萩〈メドハギ〉によるが実際はキク科の小低木コウヤボウキが用いられている。この小枝を（私の見たところによれば）百本ぐらい束ねて、筆状としてそれぞれの小枝の先端には小さなガラス玉がつけてあったらしく、よく見ればいくつか残っているのがわかった。

つまり儀式用の玉かざり箒なのだが、何とわが家の卓上には二三年前に私がつくったコウヤボウキのほうきがあったのだ。持統帝の話を聞きかじっていたからか多摩丘陵の某所で沢山とってきてつくってみたのである。〈もちろんこの場所はもう開発され尽した〉コウヤボウキという植物はせいぜい六七十センチくらいにしかなら



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com